



## 1 栗子山隧道図 高橋由一

明治十四年(一八八二) 油彩・カンヴァス  
九九・一×一四六・五

高橋由一(一八二八〜九四)は、幕末から明治にかけて活躍し洋画の黎明期を支えた人物である。由一の洋画学習は、文久二年(一八六二)に洋書調所画学局に入局し、川上冬崖に指導を受けたことに始まり、慶応二年(一八六六)には横浜のチャールズ・ワーグマンを訪ねて弟子入りしている。明治六年(一八七三)になると画塾・天絵楼(後に天絵社と改称)を創設し、弟子を育てる一方で、自らもまた明治九年より工部美術学校教師アントニオ・フォンタネージに実技の指導を受けた。

本図は、明治十四年に山形県令の三島通庸より依頼を受けて制作したものである。栃木、福島、山形の県令を歴任した三島は、東京へ続く幹線道路となる東北新道の大工事を強行した人物である。三島が由一に求めたのは、この歴史的な大工事を、油彩という目新しい技術によって記録することであったと考えられる。そして明治十四年の七月から十月にかけて由一は山形県を旅行しながら、膨大な量の写生を行った。本図に描かれているのは、日本のトンネル工事の最初期例であり、三島の土木事業の象徴とも言える栗子山のトンネルである。現地を目にした実感を筆にのせて、由一は眼前にそびえ立つゴツゴツした岩肌や、そこに覆い被さるように繁る木々を、粘っこい油絵具を力強く引き延ばし、また荒く引っ掻くようにして描いている。威圧感を感じさせる巨大な岩盤は、中央のトンネルの開通がいに困難なものであったかを見る者に想像させる。またトンネルの入り口付近で作業している坑夫たちの姿は実際よりもやや小さく描かれ、このトンネルのスケールがさらに強調されている。油彩画の写実性と堅牢さという、記録技術としての油彩の有用性を説いた由一にとつて、三島より依頼されたこの一連の創作活動は、自らの主張を大々的に喧伝する絶好の機会だっただろう。

由一が依頼を受けてこの絵を完成した直後の十月三日、東北・北海道巡幸の帰途、山形を通られた明治天皇が栗子山の隧道開通式に出席された。その時この出来たばかりの油彩画は行在所に掲げられており、そこで御覧になった天皇の御意に叶い、その場で御買上が決まったという。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に<sup>1</sup>出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 近代の洋画家、創作の眼差し

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 52

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年十月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections